教養教育センター　マンスリーコラム　vol. 3
2023 / 3 / 24

和刻本『訳解笑林広記』に見える「笑いのツボ」

川上 陽介
（日本近世文学・中国白話文学）

私は、近世日本における中国白話文学の影響について、長年研究しています。特に最近は、遠山荷塘施訓『訳解笑林広記』（文政 12 年（1829）和刻、全 305 話）の注釈作業に取り組んでいます。200 年前の中国人や日本人の「笑い」を追体験しながら、時代と国境を超えた「笑いのツボ」を、根掘り葉掘り探し回っているということです。

和刻本『訳解笑林広記』には、他の類書には見られないくらい、実に数多くの「ダジャレ」が収録されています。しかし、そもそも「ダジャレ」というものは、原則的に外国語に翻訳することのできないものですから、日本で出版された漢文笑話集に収録されないのが普通です。ところが、江戸時代きっての中国語通であった遠山荷塘が編纂した『訳解笑林広記』には、中国語の「ダジャレ」が余りにも多数収録されているのです。これまでの調査によれば、江戸時代に出版された漢文笑話集の中に「中国語音ネタ」が含まれている比率は、通常 8.5～12.8%なのですが、『訳解笑林広記』は歴代最多の 25.2%を記録しています（拙稿「遠山荷塘施訓『訳解笑林広記』小考」（『国語国文』第 86 巻第 5 号、2017 年 5 月））。4 話に 1 話が「ダジャレ」です。

和刻本『訳解笑林広記』に見られる「中国語音ネタ」とは、例えば、次のような話です（和刻本『訳解笑林広記』第 292 話「連偸罵」（原本『新鐫笑林広記』第 791 話））。

> 蘇州で菜園を営んでいる人が、野菜や果物を隣人に盗まれ、大きな怒鳴り声を上げた。
>
> 「こん畜生。春にはわしの竹の子（弟の嫁）を、夏にはわしの梅（妹）を盗みやがった。冬が来たら、今度はわしの大根（女房）までも盗み取るつもりかあ。」（拙訳）

この話は、今年度の「教養ゼミ」で学生たちと一緒に講読したものですが、男が隣人に盗まれた（盗まれそうだ）と叫んでいる「野菜」や「果物」の名前が、すべて別の意味に聞こえてしまうところが面白い（「笑いのツボ」）という話です。

1. 「竹の子」（「笋［sun3］」）＝「弟の嫁」（「嬸［shen3］」）
2. 「梅」（「梅子［mei2zi］」）＝「妹」（「妹子［mei4zi］」）
3. 「大根」（「蘿蔔［luo2bo］」）＝「女房」（「老婆［lao3po］」）

古今東西、「笑い」には、多かれ少なかれ、人間の品格を貶める要素が含まれています。また、いつの時代においても、おそらく「ダジャレ」（掛詞）には、世界中の「親父」たちを虜にする計り知れない魅力があります。この話は、そのような「ダジャレ」が大好きな中国の「親父」たちを抱腹絶倒させるものであったに違いありません。その内容が、少々「下がかっている」ところなども、「笑い」に「色」を添えているように思われます。

ここに紹介した話の注釈は数年後に公表する予定ですが、『訳解笑林広記』の前半 110 話は、「県大紀要」所収の拙稿「『訳解笑林広記』全注釈」（Web 閲覧可）によって、今すぐ味わうことができます。学生たちを笑わせるために作成した「微に入り細を穿った」珠玉の注釈を、ぜひとも隅から隅まで味わってください。そしてみんなで、明るく楽しく笑いましょう。